『人國記』の心理学的研究

— 渡邊徹『旧新 人國記』刊行 60 年を記念して (補遺 II) —

○浮谷秀一・大村政男・藤田主一

(東京富士大学・日本大学・日本体育大学)

キーワード: 渡邊徹・人國記・長谷川貢

A Psychological Inquiry into JINKOKUKI

Shuuichi UKIYA Masao OHMURA and Shuichi FUJITA

(Tokyo Fuji Univ. Nihon Univ. Nippon Sport Science Univ.)

Key Words: WATANABE TOHRU JINKOKUKI HASEGAWA MITSUGU

初めて『人國記』に接する人のために この書籍は北海道と沖縄を除く日本各地域の風土と住民の気性について記述したもので、科学的分析は不足しているものの世界で最も古い風土心理学の文献といえる。『人國記』には旧本と新本の2冊がある。前者は鎌倉時代の5代の執権北條時頼、通称「最明寺殿」によって著述されたもので、のちに武田信玄や織田信長も目を通していたといわれている。しかし、これらは誤伝で渡邊徹の研究によると出版は室町時代(1336～1573)の約240年間、いわゆる足利時代)で著者は不明である。これに対して新本は判然としている。出版は赤穂浪士の吉良邸討入り事件(元禄15年、1702)の前年である。私たちは室町時代に出版されたものを室町本、江戸元禄時代に出版されたものを元禄本と呼んでいる。ちなみに元禄本では赤穂の地域である播磨の国(現在の兵庫県)の住民については、知恵はあるが義理を知らない。親子はおたがいにだましあう。主君も少ない俸禄で立派な武士を雇おうとし、武士のほうも主君に対する態度を表裏うまく工夫している。こういうことは武家の作法とはいえないのではないかと酷評している。室町本より元禄本のほうが強い文脈でたたいっているが、翌年の大事件で著者の関祖衡も困惑したと思う。

1948年、渡邊徹は世界社からこの『旧新 人國記』を刊行したが入手困難である。しかし、浅野健二によって『人國記・新人國記』が岩波文庫として刊行されているので研究者にとっては便利である。

長谷川貢の『人國記』研究 渡邊徹の高弟で彼の没後日本大学文理学部心理学科の主任教授になった長谷川貢(1897～1990)も渡邊にしたがって『人國記』(元禄本)についての研究を残している。昭和12年(1937年)に刊行された『日本大学文学部研究年報 第5輯 哲学研究年報』の付録「祖衡本『人國記』の心理学的検討」と題する小論文がそれで、祖衡本とは私たちのいう元禄本のことである。この小論文の本体となっているのは渡邊の論文「本邦における風土心理学の発展過程に関する研究」である。この論文の冒頭で「風土心理学は環境心理学の1分科であって、自然的環境中、特に天候、気候、土地および風景の人心に及ぼす影響を研究するものである」と記述されている。このコラムの文頭にも記載したように『人國記』はまさに風土心理学の世界的な古文書なのである。

長谷川はこの古文書のなかから住民(士農工商)の気性の頻度に注目しているが、それがポジティブなものか、ネガティブなものかは本文にまかせ、気性の出現頻度だけに注目している。例えば住民の道德意識については54件が抽出されているが、その内容や地域については触れていない。日本人は狭い島国で家族の出自なども問題にしがちである。特に関西はめんどろそうである。長谷川は『研究年報』が公刊物なのでわざと避けたものと思われる。しかし、それでは一と思うので、地域名を伏して現代文で紹介しておくことにする。

道德意識プラスの地域: この国の住民は心身ともにしっかりしていること日本一である。生まれつき義理がたい。道德意識マイナスの地域: この国の住民は気心が偏屈で強盗や山賊然とした行為をする。正道を歩む人は少ないが、武勇には優れ日本第2である。第1は伊豆で強中の強といわれる。住民の気性の頻度を地域・評価抜きでまとめたものがTable 1である。

Table 1 『人國記』(元禄本)で記述されている住民の特性

気性の種類	件数	%
A 道德に関する意識	54	16.7
B 勇気・意気ごみ	42	13.0
C 気質(慎重・度量・柔和・野卑など)	42	13.0
D 忠実さ	40	12.4
E 利得心	23	7.0
F 知的なはたらき	23	7.0
G 他者を尊重する心持ち	19	5.9
H 意志を貫徹する心	17	5.3
I 協調心	14	4.3
J 派手好み・質素儉約	11	3.4
K 高慢さ	9	2.8
L 性的欲求	8	2.5
M 勤勉さ	7	2.2
N 放逸(勝手気まま)	6	1.8
O 軽率(軽はずみ)	6	1.8
P 名誉欲	3	0.9
件数	324	100.0

総括 『人國記』の元禄本の特徴はなんといっても地図が掲載されている—ということである。そのほかは室町本を下敷にしている。山城国(現在の京都を中心とする地域)を例にとれば、室町本では「男女とも言葉づかいがはっきりしていて水が流れるようである。しかし、王城の地なので管絃の楽しみに馴れ武士は軟弱に流れ商人も実を失っている。」と記述している。これに対して元禄本でも「古来王城の地でゆたかなので自然と心がゆるまって知らず識らずのうちに派手好みになってしまった。武士は軟弱で(商人とはいっていないが)人びとは軽薄である。」と反復している。

元禄本は室町本のコピーとはいえないが、室町本が下敷になったことは明らかである。ただ、この山城国の住民の風俗と現代の京都人の住民性とを対照させるのは無理である。これはどこの住民性についても同じことである。ただなんとはなしに結びつけたくなるのは風土心理学を超えた人情ではないだろうか。文化人類学者の祖父江孝男もその著『県民性の人間学』(平成12年、新潮文庫)のなかで「京都人はプライドが高い」としている。私たちが背負っている歴史はいつまでも重いようである。